

横山ゆずり作 「心に制服を着ないで」

(音楽) (寂しい感じ)
(効果音) (教室のガヤ)
女子C ねえねえ藤吉、3番、これでいい？
藤吉佑子 3番はね、ここに入る関係代名詞は what じゃなくて that だってことなの。
女子A え、なんで？
佑子 この場合、先行詞に every が付いてるでしょ？ だから…。
女子B ねえ藤吉、ちょっとちょっと、6番の答え、なんになった？
女子C それよりさあ…。
佑子 ちょっと待って。こっち終わってから。
女子A ねえ、なんで every が付くと that じゃダメなの？
佑子 だからあ、さっきも言ったでしょ。…ちょっと、志村君、志村君ってば！
志村貴彦 え？
佑子 「え？」じゃないわよ。少しは協力してほしいんですけど！ 毎日30分ずつ、班学習やることになってるじゃない。忘れたの？
貴彦 ああ、そうだったっけ。
佑子 だったら、もっとさあ。志村君はできるんだから、どんどんみんなに教えてくれてもいいじゃない。
貴彦 でもおれ、…あ、もうこんな時間！ やべエ、帰んなきゃ。今日、家庭教師が早く来る日なんだ。じゃ悪いけど。
佑子 あ、ちょっと待ちなさいよ。はい、これ。あたしたちの班の班ノート。次は志村君の番よ。
貴彦 え、ンなもん、いいよ、おれ。パス。
佑子 ダメ。志村君、2学期になってから、一度も書いてないもん。絶対書いてよね。
女子A 藤吉、あいつ、なんだって？
佑子 ン、一応班ノート、渡しといた。
女子B いくら佑子が言ったって。ほっときな。志村はなんたって学年トップだからさ。
女子C あたしらみたいなパープーに構ってる暇なんかない、ってわけ。
佑子 だって、無責任じゃない、そんなの。あの子だって、5班の班員なんだから。
女子A 5班とか、何組とかって、あいつに通用すると思う？
女子B そうそう。あいつはさ、一人で勝手にガリ勉して、K大付属にでも受かっちゃえば、それでいいでしょ。
女子C 全く、やあね。
男子 あいつ、前はあんなじゃなかったぜ。2年の途中までは、バスケ部でさ。確か

に頭よかったけど、“ガリ勉”ってわけじゃなくて、高校も、「バスケの強いところに行く」なんて言ってて、それが突然部活やめて、それからだよな、あんな暗〜になったの。

女子A だからさ、3年ももう2学期なわけじゃない？ 受験が近づくと、やっぱ、本音が出ちゃうってことよ。

女子B そうそう。ま、できるやつは、欲も出てくるって。いいじゃん、志村のことなんか。

女子C それより、これ。ねえ、こういう問題の場合はさ…。(FO)

(効果音) (ガヤ)(戸を開ける音)

貴彦 ただいま。

母 あ、お帰り、貴彦。今日は英語の原先生がいらっしゃる日だったかしら？

貴彦 原先生は火曜日。今日は、中谷先生だから、数学と理科。

母 ああ、そうだったわね。中谷先生は、K 大付属高校のご出身だから、いろいろと入試の傾向なんか、伺っとくといいわね。

貴彦 うん。

(効果音) (階段を上がり、自分の部屋に入る。)

貴彦(モノローグ) (ため息)K 大付属か…。道は遠いなあ。あそこは、偏差値70でもギリギリだからな。おれの今の力じゃ、本番でちょっと調子悪くて失敗したら、アウト。一巻の終わりだもんな。去年は、うちの中学から1人しか受かってないし。そのためにバスケだってやめたんだけど…。

(回想)

佑子 (エコー)志村君も少しは協力してよ。

男子 (エコー)あいつ、前はあんなじゃなかったぜ。

女子B (エコー)一人で勝手にガリ勉してりゃいいのよ。

佑子 (エコー)班ノート、志村君の番よ。

貴彦(モノローグ) あ、そうだ、あれ。(ガサガサ、カバンを探し、ノートを取り出し、ページをめくる。)班ノートなんて、こんなカッたりいこと、よくできるよ。へえ、みんな、結構書いてんの。よっぽど暇なんだな。(ページをめくりながら)小島、西田、中村、藤吉、で次がおれか。みんな、何書いてんだ？ ふーん…。

「11月〇日。藤吉佑子。今日も雨。それでなくても落ち込んでしまうのに、この天気、なんとかしてよ。最近このノート、ヤケに暗いと思いませんか？ ま、受験生だから、しょうがないか。」

ふーん、藤吉なんか、そんなに暗く見えないけどな。

「わたし、この前、考えたの。受験が終わった時のこと。(佑子の声)に)そしたら、なんかゾツとしちゃった。なんでかっというと、まず落ちた場合。これは当然だよな。じゃ受かった場合はどうかって言うと、もちろん、その時はうれしいと思う。」

でも、また少ししたら、大学受験に向けて、今みたく勉強するわけでしょ。ただ外見が、今の中学の制服から、どっかの高校の制服に代わるっただけで、また同じこと繰り返すのかな、と思ったら、なんか、…ごめんごめん。わたしって性格くらいね。でも、そんなこと考えてたら、自分は、“それに流されたくない”って思った。

(音楽)

(BGM。明るい感じ)

貴彦(モノローグ) (続き。佑子の声で) 厳しい受験生だからこそ、「気持ちだけは自由でいたい」っていうか、「心まで、ガチガチの受験生にはならないぞ」って思う。だって、わたしたち、まだ若いもんね。わっ、青春してしまった！ とにかく、明るく行こうぜい！ 最後に、わたしがすごく好きな詩を書けね。

木には望みがある。

切られても、また芽を出し、

その若枝は絶えることがない。

木には望みがある。

切られても、また芽を出し、

その若枝は絶えることがない。」

(音楽)

(BGM、高まって、カットアウト)

(効果音)

(ノートをバシッと閉じ、バサッと投げ出す。)

貴彦ナレーション 関係ねえや。おれは、あいつらみたいに甘いこと、言ってらんないんだ。班と一緒に勉強とか、クラスで助け合うとか、そういうの、勘弁してほしいよ、全く。入試の時に、仲良く教えっことできるかって。冗談じゃないよ。みんながなんて言おうと、関係ない。おれは K 大付属を目指す。決めたんだ。そう、あの時から…。

(音楽)

(回想。ブリッジ)

父

おい、母さん。懐かしいものが出てきたぞ。ほら。

母

あらまあ！ほんと。あなたの学生時代の写真なんてどこに入っていたのかしら。

貴彦

へえ、これ、お父さん？ うへえー、信じらんねえよ、この若さ。これ、幾つの時？

父

うーん、そうだな。この制服だから高校生の時だな。

貴彦

ふーん。じゃ、K大付属の制服なんだ、これ。

母

そうよ。今でもこのデザイン、変わってないんじゃないかしら。貴彦も、お父さんの跡を継いで、ここに入れるといいけどねえ。

貴彦

ええ、冗談！ K大付属なんて、ムリだって。それにおれは、バスケの強いところに行きたいからさ。

母

またそんなこと言って、貴彦。

父 ま、いいじゃないか。人それぞれだからな。まあ貴彦、青春の記念のつもりで、受けるだけ受けてみてもいいかもしれんがな。

(音楽) (回想終わりのブリッジ)

貴彦ナレーション それまでも、おやじの学生時代の話は、何度か聞いていた。だけどあの時、高校生のおやじの写真を見た時、なんかこう、「あ、おれもここに入んなきゃ」って思ってしまった。

父 (エコー) まあ、青春の記念のつもりで、受けるだけ受けてみるんだな。青春の記念でな。

貴彦ナレーション それは、意地とか、おやじへの対抗意識とか、そういうんじゃないで、とにかく、おれも、「あの制服を着なきゃ」っていうか、まあそんな気持ち。

(音楽) (寂しい感じ。BGM)

貴彦ナレーション その時から、部活もやめて、塾行って、内申が悪くなるとヤバいから、先生の受けもいようにして。…でも、不思議なんだ。おれは、少しずつ偏差値も上がって、確実に一步一步、あの高校に近づいてると思う。それなのに、なぜか、前より遠く感じてしまう。自分の父親の母校っていうような親しみなんかなくなって、むしろ、よそよそしいというか、なんかこう…。

(音楽) (BGM高まって、カットアウト)

(効果音) (教室のガヤ)「おはよう！」「オッス」「ねえねえ」

女子A ちよつとちよつとお、あれ見た？

女子B あれって？

女子A あれよお。こないだの模試の順位、はってあんの、昇降口のどこ。

女子B ああ、あんなの、50位まででしょ。わたし、関係ないもん。あんた、まさか出たの？

女子A あたし？ まっさかあ！

女子B だろうね。

女子A 何よお！

女子C それよりさ、志村がさ。

佑子 おはよう。何騒いでんの？

女子C うん、志村がさ、ベストテンからおっこつてんの。

佑子 ほんと？ あんなに勉強してたのに…。

男子 あいつ、スランプなんじゃないの？ まあ、そういうときもあるって。あ、志村だ。おい、志村、オッス！

貴彦 ……。

男子 なんだ、お前。何 落ち込んでんだよ？

貴彦 別に…。

男子 テストの順位のことか？ ま、そんなに気にすんなって。お前なら、すぐまた上

がるって。

貴彦

…。

男子

おい、シカトすんなよ。お前なんか、50 番に入るだけいいぜ。おれなんかと比べりゃ…。

貴彦

(ボソッと)比べんなよ。

男子

え？

貴彦

お前と比べていくらよくて、うれしくねえよ。

男子

なんだと！

貴彦

なんだよ。おれの順位なんて、お前に関係ねえだろ。

男子

そういう言い方あるかよ。人がせつかく…。(怒りを抑えて)お前、ちっと成績が人よりいいかも知らないけどな、はっきり言って、そういう性格、最低だぜ。

貴彦

関係ねえだろ。

男子

何を！

貴彦

なんだと！

(効果音)

(2 人、乱闘。周りの女子の悲鳴、止める声、騒ぎ、机、イスの倒れる音など高まり、カットアウト。)

(音楽)

(場面転換のブリッジ)

貴彦ナレーション

右腕骨折。全治 1 か月。最低 2 週間の安静を要す。

(効果音)

(鋭く、渴いた金属音)

貴彦ナレーション

オロオロするおふくろ。慌てる先生。そんな中で、おれは、悔しさ、いらだち、怒り、そして、なぜだか自分でも分からないけど、かすかな^{あんど}安堵感を一緒にたにかみ締めていた。

あいつに言われたこと、悔しいけど、全部当たっていた。K大付属という目標に向かって、走り続けてた。いや、ただ走ってたんじゃない。他人を蹴飛ばしながら走っていたおれ。それが、あとちょっとのところ、転んじまって、惨めにリタイアだ。でも、おれのどこかで、「ああ、これでやっと休める。自分らしいペースの走りに戻れる」という気もしていた。それは、いつの間にか、おれの心をぎゅうぎゅう締め付けていた、目に見えない“制服”、あの幻のK大付属の制服を脱ぎ捨てることができそうな、そんな予感だった。

佑子(エコー)

木には望みがある。

切られても、また芽を出し、

その若枝は絶えることがない。

木には望みがある。

切られても、また芽を出し、

その若枝は絶えることがない。(ヨブ記 14 章 7 節)

<完>